



## 【巻頭言】

### 「就任にあたり思うこと」

エレクトロニクスソサイエティ次期会長

大橋 弘美 (NTT エレクトロニクス)



このたび、エレクトロニクスソサイエティ次期会長に就任しました大橋弘美です。これまで、電子情報通信学会には様々な形でお世話になってきました。昨年度、エレクトロニクスソサイエティ研究技術会議の副会長を仰せつかり、引き続き、今年度、次期会長として、電子通信情報学会の運営にかかわるようになりました。少しでも、ご恩返しできるようにしたいと思っております。よろしく申し上げます。

皆様ご存じのように、電子通信情報学会は2017年に、100周年を迎えることもあり、学会の“あり方”について様々な場で議論されています。私も議論に加わり、学会のあり方を自分なりに、考えてきましたので、今回、この場で紹介させていただきたいと思えます。

人は、様々なコミュニティの中で活動しています。企業、研究機関、大学、親族、家族、友人、など、各々のコミュニティが自分にとってどんな存在か、どんな存在意義を持つのかも、様々です。そして、その中で、学会は、どんな存在であるべきなのか、を改めて考えました。

冒頭に書かせていただきましたが、今回、学会運営に関わる際、私は、自然な気持で、これまで育てて頂いた学会に少しでも恩返ししたいと思えました。つまり、私にとって、学会は、成長させてくれた場だったのです。さらに言えば、学会という、研究活動を通して、同じ分野の方、関連分野の方との、コミュニケーションを提供してくれた場であり、そのコミュニケーションを通じて知り合った方々に育てていただいたことを感じています。

コミュニケーションは、国内会議、国際会議、研究会、論文、学会誌という形で提供されています。これらをコミュニケーションとして提供する場であるならば、学会は、広く、グローバルな活動を提供できる場であるべきです。電子通信情報学会は、国内のコミュニティでありますから、まず、国内のコミュニケーションを提供する場ありますが、当然、国際的活動を提供できる場でもあるべきです。

また、別の視点でも考えてみました。日本は、現在、変化を求められている局面にあります。戦後の高度成長時期を終え、そこで生み出された産業が、形態を変えつつあります。また、高度成長時期に生み出された技術が、国内の

枠を超え、海外で活用されている現在、日本の産業の形態は、同じものではありません。海外企業の柔軟な積極さに対して、日本企業の守りの姿勢では対抗できない状況を感じます。さらに、3.11においては、日本の技術力の限界も感じました。これらの状況下において、学会の役割も変わらざるをえませんし、これまで以上に重要な使命を持っています。単なるコミュニケーションを提供する場でなく、積極的に、世界に打って出る仕組みづくりを引っ張ることも必要だという議論も“あり方”ワーキングでは出ていましたが、私もその必要性を感じています。

以上、問題意識を羅列しただけになってしまいましたが、この問題意識の元に、学会活動、国内会議、研究会、論文、学会誌がどうあるべきか、再度考えたいと思えます。

昨年度、エレクトロニクスソサイエティは、新しい組織体制に向けて議論を進めてきました。新しい組織体制変革の主旨は、学会の活性化です。エレクトロニクスソサイエティの活動は、多くの研究専門委員会で成り立っていますが、その一方で、研究専門委員会委員長で成立している研究技術会議は、大きすぎる組織になってしまっていて、議論が十分できていないのではないかと、という危機感があり、提案された変革の一つです。ぜひ、新たな組織体制において、皆様のお考えを積極的に提示いただき、新しい時代に対応していきたいと思えます。

最後になりますが、電子通信情報学会は皆様の努力で成り立っていることを日々感じています。すでに、任期も三分の一がすぎようとしています。私自身が多くのことをできるとは思っておりませんが、皆様のご指導、ご鞭撻をいただきながら、活動させていただきたいと思えます。

#### 著者略歴：

1985年早稲田大学卒、1987年東京工業大学修士課程修了。同年日本電信電話株式会社基礎研究所入所。半導体低次元光非線形の研究に従事。1993年フォトニクス研究所。光半導体デバイスの研究開発に従事。2007年東京工業大学博士(工学)学位取得。2014年からNTTエレクトロニクス。

2013年IEEE Photonics Society Japan Chapter Chair、2014年6月エレクトロニクスソサイエティ運営委員会研究技術会議副会長。